

る解釈も成り立たないのではないかと言った指摘がされることもあり、いわば真剣での渡り合い、なるほど京都の研究会は怖いと言う人たちの気持ちもむべなるかなと得心したのであった。

読書会が終われば、著者を囲んでなごやかに昼食、そのあとの午後は会場を現代中国共同研究室からセミナー室に移して、通常の研究班例会が五〜六時まで続く。読書会において下さった著者たちは、多くが午後の研究班にも引き続き参加してくれたが、それはそれで「音に聞く」人文研の共同研究班なるものを体験してもらおうよい機会であったようだ。この読書会、一年半で九冊、計二十一回の開催だから、決して多くはない。また、通常の午後の研究班に加えて、午前も会、夕刻以降は毎回の懇親会と、金曜は隔週でなかなかハードな曜日となったことも確かである。だが、ひとくちに現代中国研究といっても、こんなことでもなければあまり熟読する機会のない文学や経済の研究書にも触れられ、大いに得をした気分になれたのだった。こんな仕掛け、また折りを見て試してみたいと思っ



ヘンリー・ミヤタケさんと日米戦争

竹 沢 泰 子

シアトルに滞在中だった知人から、日系二世のヘンリー・ミヤタケさんに会ったと連絡があったのは、二年前のことだった。ヤスコを知っているか、と聞かれたいらしい。ヘンリー。生きていてくれたんだ。お互い引越しを重ね、連絡が途絶えたままだった。このところ、二世の旧友の訃報が相次ぐなかで、その知らせを受けて胸が熱くなった。すぐに国際電話をかけ、元気な声を聞き、学会のある数ヶ月後に必ず会いに行くと英語で伝えた。

ヘンリー・ミヤタケは、シアトルにおける日系アメリカ人の強制立退き・強制収容に対する補償要求運動において、一九七〇年代、重要な役割を担った中心人物の一人である。当時、同じ日系社会のなかでも、集団補償案を強固に提唱するカリフォルニア拠点の日系団体と、個人補償案を訴えるシアトルのヘンリーらのグループとの間では熾烈な戦いが何年も繰り広げられていた。ヘンリーは、素人ながら、膨大な判例を調査

して個人補償の可能性を突き止めた筋金入りの闘士である。彼の案が後のアメリカ政府による個人補償と謝罪へとつながった。

ワシントン州の州花、石楠花が華麗な大輪で家々の庭先を飾る6月、ヘンリーは、シアトル・タコマ空港に年季の入ったトヨタで迎えに来てくれた。背の高い立派な体格であった彼は、大病を患ったらしく、大きく腰の曲がった、小さな痩せこけた老人になっていた。彼のお気に入りの回転寿司屋で、北西部名産のグイダック（みる貝）やサーモン巻きに舌鼓を打ちながら、私たちは再会を何度も喜び、時の経つのも忘れ、さまざまなことを語り合った。

ファストフードの寿司屋で三時間以上過ごしただろうか。彼の詳細で正確な記憶、瞬間毎の判断力は、外見とはまるでかけ離れたものだった。インタビュのために会っていたわけではなかったが、あまりに貴重な歴史証言たるべき話を始めたので、私は彼の許可を得て、ICレコーダをまわし始めた。

日本で高視聴率を得たTVドラマ『九九年の愛（Japanese Americans）』（脚本、橋田壽賀子）は、日系人がどのように土地や資産を失ったか何も説明しておらず、誤解を与えかねないと辛口のコメントを吐いていた。戦前カリフォルニアで大農園主の日系人が

所有していた土地も、貸していた借地人らが意図的に納税を怠り、そのため土地は政府によって差し押さえられ、競売にかけられ、その結果、借地人らの狙い通りに廉価で土地は彼らの手に渡った。カリフォルニア米で有名な、あのコウダファミリーも、戦後アメリカ政府を相手取り訴訟を起こし、勝訴したものの、その補償金はほとんど弁護士懐に入ってしまった。

次に話してくれたのは、日米戦争の折のアメリカによる暗号解読のやり方であった。ある日本政府関係者がワシントンD.C.の日本大使館に向かって暗号機を運搬する途中、カンザスシティで外出することがあった。その間、暗号機を金庫に入れたのだが、その後、その機械に得体の知れない異常を感じたという。後になつてわかったことだが、知らない間に情報局の手によって金庫から暗号機が取り出され、解体され、解読された元のように金庫に戻されていたのである。戦後、ヘンリーが、他の日系人から聞いていたその話を情報局のアメリカ人に確認したところ、金庫から取り出したことを認めたという。

続いて、シアトル郊外のベインブリッジ・アイランドがなぜ全米で最初の日系人強制立ち退きの場所として指定されたのかについて語り始めた。定説では、軍事基地が存在し、その小規模な日系人人口からして、

試験的に行うのに適していたからだと言われている。ヘンリーによると、島では当時、材木業を営んでいた日系人たちが、切り株をダイナマイトで処分していた。そうした爆破技術を持つ日系人の存在を恐れた米軍がベインブリッジからの日系人の立ち退きを急いだのだらうという。

ヘンリーは、もうひとつ、書物に書かれていない話で私を驚かせた。彼がいうには、二世の多くは親の一世より早死にした。そして以下の話を始めた。アイダホ州のミニドカ収容所周辺では、労働力不足のため、逃亡の恐れのない日系人が夏になるとポテトの収穫に駆り出された。後で知ったことだが、農場の土壌は、近くの工場の廃棄物によって、放射能で汚染されていた。戦後、彼の仲間のうち四人が白血病で命を奪われたが、全員、実は、作業する際に手袋をはめていなかった。ヘンリーは人体への影響を恐れてゴム手袋をはめた。嘲笑的になったが、他の一部の二世もそれに倣い、手袋をはめて作業した。結局その手袋が生死を分かつことになったのだと彼は言う。一九八〇年代になつて、アメリカ人の元農業労働者らがその会社を訴訟したが、それを知った時にはすでに手遅れだった。話を聞きながら、今は見えない、福島原発事故による数十年後の影響がいかなるものかと心に暗雲が立ちこ

めた。

これらの話が、専門家にはすでによく知られた話なのか、軍関係の公開資料と照合可能なのか、私には判断のすべがない。彼の研究者顔負けの緻密な調査や慎重な論理の組み立てから言えば、信憑性のない話だとは思えなかった。

日系アメリカ人の強制立ち退き・強制収容は今春で七二周年を迎える。日米開戦とともに、人生を狂わされた日系アメリカ人。彼らの歴史については、すでに多くの書物やオーラルヒストリーが残されているように、実はまだ多くが、今は亡き人々とともに葬られたか、ヘンリーのような一握りの生存者の記憶にのみ刻まれているのかもしれない。

固辞する私をワシントン大学近くのホテルまで送ってくれた。次に会えるのはいつだろう。笑顔で運転席に戻るその背中に、彼が抱えてきた歳月の重さを感じずにはいられなかった。

掃除のおじさん

藤原辰史

京都に来るまえ、品川に四年ほど住んでいた。ゴミ焼却炉の煙突と、ダンプカーの煤煙と、光化学スモッグと、窓を開けると耳を刺激する騒音に囲まれた公共住宅が住まいであった。すぐ近くに大型道路も、新幹線も、京急も、モノレールも走っていて、粉塵と騒音の理由には事欠かない。バスで十分ほど離れた品川駅の朝は、高輪口と港南口を結ぶ通路を、黒い服を着たサラリーマンたちが十列縦隊くらいで、黙々と職場に向かう。

だが、晴れば雪のかぶった富士山を遠くに眺めることができる。最寄りの青物横丁駅の北側には下町が広がっていて、祭りの日は、品川生まれのお母さんも法被を着て屋台でお酒を飲む。商店街も元気で、いつも「つすよ」と語尾をつけるサラリーマンたちが昼や夜に胃袋を満たし、肝臓を痛めにやってくる。にぎわいを見せている。目黒川の河口付近にある近くの海上公園は、下水処理施設の近くに作られた公園である。